

佐々倉先生を偲ぶ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 誠 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026140

先生の御研究は休むことなくつづき、ことに数年前から、かつてのデーターを整理して貴重な論文を学会誌にだされた。その整理をことのほか楽しんでしておられた。その御姿もありありと思い出される。それが晩年の整理のようになったことは皮肉である。しかも未整理のものも少なくないらしい。これらの完遂を期待して居られたことを思いあわせると、御気の毒にたえない。学問的研究のほかに随筆を楽しまれたことは皆よく知っている。その随筆集を発刊する御計画も拝聴しているし、船の模型の写真集の出版計画もうかがっていた。先生御自身の手でこれらが完遂されなかったのは残念であらう。写真に熱中されて雲も大分撮影された。近郊を散策されてスケッチを描かれたこともあったし、スケッチの描き方の本をわざわざ見せて下さったこともあった。先生程多趣味の方は少ないように思われたし、何をされても人一倍夢中になって楽しんで居られた。そこに先生の先生らしさがあった。座談も人一倍御すきだった。書物を多読されるだけあって話題は豊富だった。時には我々をはじめ学生を相手に面白い話をされた。その御話にはいつも先生の独特の人生観がひそんでいた。

先生をおおくりした後の教室は、望月先生なきあとをついで第二回目の変革期におそわれた。この変革は両先生の風格の然らしめる結果として、我々には大きいショックである。余りにも第一回目の変革につづいてはやくおこりすぎた。我々のうけるショック以上に、奥様はじめ御家族一同には更にさらに御悲嘆の極みであることを忘れることができない。我々地学教室は先生によってその基礎がかためられ、将来への軌道はひかれた。その御遺業をうけて幸い我々はそれにそって安全に運転をつづけてゆけばよい。先生の御苦勞に甘んじて我々はたどるべき将来のみちをはっきりふみしめるであろう。先生の御高德に浴した我々は、必ずや御厚恩にむくゆる努力をするであろう。これが先生と御家族に対して我々のなし得る最善のみちでなくてはならない。

(静岡大教育学部)

佐々倉先生を偲ぶ

山 崎 誠

41年1月7日佐々倉先生の突然の御逝去は気象の勉強を志す私たちにとって、学問の指導者と同じ時に心の支えを失った暗い日であった。もう小刻みにこつこつと音高く歩まれた先生にお会い出来ないとは今でも信じがたいのは私だけだろうか。

私にとって先生は慈父であり、頑固親父でもあった。静岡大学にはいり補導教官として御指導をお願いし、4年生になり卒業論文の御指導をいただいたので時々先生のお宅に伺った。先生は大きな平机の前に和服姿で端座され

「僕はこの方が好きだから、君は楽にしたまえ。」

と私の気をほぐされてから色々御指導下さるのが常だった。机の上には硯、筆が置かれちょっと文筆家が連想される部屋のたたずまいで、事実先生は数々の随筆をはじめ和歌などをたしなまれ、私もそのいくつかをいただいている。

又、手紙類がきちんと二つに分けられているので不審に思ってぶしつけにお尋ねしたところ

「1つは返事をした分で1つはまだ出してないのだよ。便りをもって返事を書かないことほど失礼なことはないからね。」

との返事であった。多分受取られた便りについて心すすむ折り折りに誠意をこめて筆を持たれたのだろう。手紙はいつも毛筆であった。古き良きものを格高く保たれた先生であった。

ある正月、寮にいと、正月を一緒にやろうと御招待下さった。

「僕は酒はだめだからこちらでやるよ。君は大いにやりたまえ。」

ブドウ酒のグラスを口に運ばれ、私だけ酒をいただいた。"何もないけど1つ"と奥さんは次から次へと料理を運んでこられ、大きな机も料理でいっぱいになってしまった。格別なおいしさと遠慮なしにいただく私に

「家内は時々料理の教授に行くことがあるんだよ。」

と先生は誇らしげに料理の説明などなさった。いつも明るい、平和な、なごやかな御家庭であった。

大きなマスクをしておいでになった先生も印象深い。先生は人一倍健康に気を配られ、薬をよくお持ちになった姿に幾度となく接している。かつて望月勝海先生を悼む会で

「先生、おからだは是非大切になさって下さい。」

といったところ

「君、私が死ぬと思うかね、大丈夫だよ。」

と自信あり気だった。それも常におからだに留意された先生の自信過剰であったのだろうか。それとも病魔はより以上に巧妙に先生を蝕んだのだろうか。

こう思い出をたどってくると、静岡地学会例会で富士山測候所長の藤村先生を迎えて愉快げに談笑されていた先生が、どうしてお目にかかる最後の先生のお姿と思えたのだろうか。

私の胸には就職の報告に伺った時

「君の本当の勉強はこれからの筈だよ。」

とおっしゃった先生のお言葉がいまもなお生きている。そしていまの私は暗夜に燈火を見失った感を感じただただ悲哀の極みである。

(富士宮四中)